

四谷の

千枚田だより



創刊50号
記念特集

先祖の遺産

「四谷の千枚田」

四谷の千枚田の概要

かつては、千二百九十六枚の棚田も昭和四十六年、国の減反政策（米あまり対策）で休耕、転作が余儀なくされた。

当時を振り返ると、耕作者は行政指導で幾晩も幾晩も集会所に集まり協議、議論がされた。

耕作者のほとんどが「この、田んぼは先祖の物だ、俺の代になくすわけにはいかない、ご先祖様に申し訳ない」と一致した意見であり、各戸における減反割り当ては難航した。にもかかわらず、国の強攻策に百姓の意見、主張は通らず、減反政策は施行された。

そして、経済成長の担い手、労働力の供給として都市工場などで働く耕作者も、減反政策に猛反対していたが、効率の悪い段々田んぼを夜勤明けや早朝に無理して耕しているより、やめて（休耕・放置）しまったほうが体に楽だということを減反政策から学び休耕、杉檜の植林が

加速し、平成八年には三百七十三枚まで減少してしまった。

では、なぜ、これだけ見事にまとまった棚田が現存するのか、その経緯を具に（身を持って）受けてきた筆者の当時の状況から鑑みると、まず、効率の悪い（棚田はすべて効率

が悪いが中でも・・・）山側や急傾斜地を優先的に減反対象にし、水利や作業面から比較的優れた場所を保全した先人の知恵が先祖の偉大な遺産「四谷の千枚田」として保存、水田総面積 三百六十アール
耕作総枚数 四百二十枚
地元耕作者 二十二名
保全支援 三グループ
一枚当たり 0・八六アール

棚田耕作者平均年齢 五十九才
四谷の千枚田は農家一戸当たりの耕作面積が約十二アールと少なく、余剰米などの販米から得る生産性は極めて低い。また、遊休農地、放棄地も少なく、オーナー制などの導入にも今一歩踏み切れないのが実状であるが、今後の課題として取

我旁に過ぎたる恵みに恥じらいつ
赤まんま咲く畦に立ちたり 四谷 柳二
天と地の間に段々 広がりて
千枚田と言ふ 農の芸術 瀬戸市 河内千代子
目に収 棚田千枚 秋あかね 蒲郡市 高橋克代

り組む姿勢である。

鞍掛山麓千枚田保存会

四谷の千枚田の保存・保全を目的に平成九年一月十二日、鞍掛山麓千枚田保存会として発足（現在の会員二十八名）

会員の構成 千枚田の耕作者 二十三名、地主 三名、支援グループ 二
保存会の活動および事業
「環境整備事業の推進」、「保存に

関する啓発・情報活動の推進」、「国・県・市等関係機関との連絡調整」、「その他、保存活動に必要な事項の調査活動の実施」

お世話になっています。



田吾作

平成十四年、棚田の耕作者で組織する「田吾作」を結成。高齢化などにより棚田の耕作ができなくなつた農地を借りて有機・減農薬栽培に極力努め、耕作放棄地の解消を図っている。毎年、十二月の第二日曜日に収穫感謝祭として「餅つき大会」を行い、都市交流イベントを開催している

連谷お助け隊

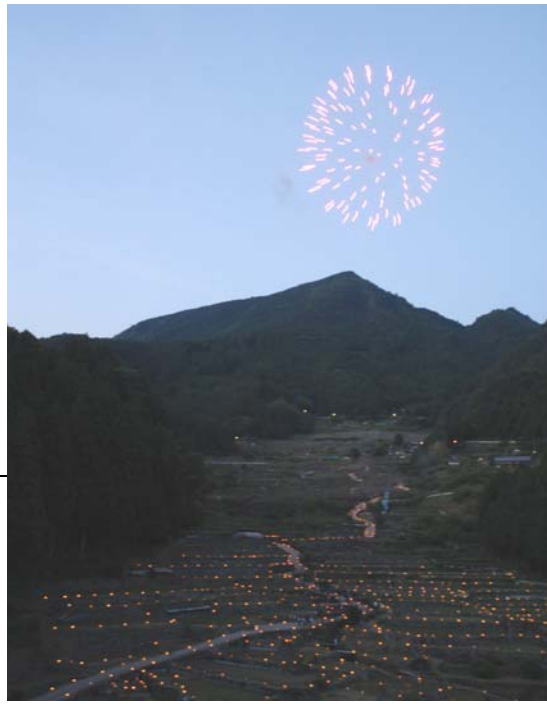
みんなを灯そう千枚田

平成十七年、第十一回全国棚田（千枚田）サミット開催を継起に四谷の千枚田に拘わる地元若い衆二十二名は平成十六年七月三日、サミットサポート組織「連谷サミットお助け隊」を結成、全国から訪れる棚田関係者を心から迎え入れようと頑張り、成功に導いた。その、成



功の余韻を地域の活動、村おこしに活かそうと「連谷お助け隊」と名を改めて地域発展に貢献している。六月二日、

千枚田の景観道や田んぼの畦に千二百本のローソクを灯す第二回「みんなで灯そう千枚田」を実施、幽玄な世界を醸し出した。



位置づけ、取り組んでいる。この七年間で児童数は半数以下の十名と極小規模となった。しかし、諸活動は上学年から下の学年に引

継ぎ、発展継続している。

都市交流

①「みんなの奥三河」(シリーズ)

く見て・感じて・学んで！奥三河の素晴らしさ・大切さをく新城設楽地域では、食と緑の基本計画・地域推進プランに基づき、都市と農村村とが協働・連携した新たな交流のモデルづくり

千枚田売店 棚田っ娘

平成十三年、地区内の女性達で農産物等の直売を目的に地域の活性化に取り組んでいる。

未来への継承 連谷小学校

平成十三年から、四谷の千枚田の田んぼで田おこしから代かき、田植え、稲刈り、脱穀等の作業を全校で行っている。当初、二十数名で取り組んだ総合的な学習「千枚田を開こう」も、その後、全国棚田サミットでの発表を中心とした「千枚田に学ぶ」を経て、今年から「千枚田で活きる」というテーマで食育も大きく

のおつつう、梅酒、手作りの漬け物)をご馳走になり、感激・・・

午後は、お助け隊の指導でナイフやノコギリを使い、竹トンボや竹馬作りに挑戦、お助け隊や地域の人達と和気藹々の交流が図れた。

九月二十九日、あいにくの雨で稲刈りは中止、田吾作代表から参加者が植えた稲の生長と有機・無農薬栽培の大切さの説明を聞き、自然観察会を兼ね、身平橋集会所へ移動、そこで、田吾作のみんなと釜飯を炊き昼食を楽しんだ。

午後はお助け隊指導により水鉄砲作りなど、昔の遊びに興じた。

②「三河の山里ツーリズム」

(シリーズ)

三河の山里を身近に感じ、理解を深めていただくために実際に山里を訪れ様々な生活体験を行うことを目的に「三河の山里活性化事業実行委員会(愛知県、三河山間地域市町村・中日新聞社)」主催により実施している。

内容は五月十二日 田植え、七月七日 田の草とり、九月八日 稲刈りと、自らが植えた稲の収穫までを体験。田んぼにカエルやドジョウ、タニシなどの生物の多さにびっくり、これらの生物が害虫駆除や除草効果をもたらしているなど、自然の仕組みを小山舜二(愛知県ふるさと指導

員)から学んだ。

昼食は毎回、季節の具材をふんだんに使った田舎料理に参加者は大喜び、おかわりの連発であった。地元のおっ母さんたちは「来て、食べて、喜んでくれりゃあ、それでいい・・・」と淡々としている。これが心だ！と痛切に感じた。

四谷の千枚田は元気がいい

冒頭にも述べたように「四谷の千枚田」は面積も少なく、生産性も低いですが、千枚田を糧に活動する地域の団結力は近隣からの評価も高い。

受賞・認定等

- ・日本の棚田百選 農水省
- ・農村アメニティ・C 農水大臣賞
- ・あいちの自然百選 県環境部認定
- ・東海美の里百選 東海農政局長賞
- ・第十一回全国棚田サミット開催
- ・念仏おどり むらの伝統文化顕彰
- ・食と緑が支える県民の豊かな暮らしづくり 愛知県知事賞
- ・ふるさと水と土指導員設置制定
- ・豊かなむらづくり 東海農政局長賞
- ・とうかい水土里フォーラム(講演) 東海農政局

平成十五年「ふるさと水と土ふれあい事業」で作業道(景観道)が整備された。それまでは、軽トラも通らなく、耕耘機などの出し入れもままならない状態で、「こんな田んぼ、まあ、いらん」というのが耕作者の

ほとんどの実感であった。作業道（景観道）が整備され、軽トラもスイスイ、耕耘機も楽々、都市から大勢の方達が訪れる。

おかげで、棚田の保存はもとより、地域も活き、都市の方達に憩い、潤いを与える素晴らしい事業（素晴らしい税金の使い道）を導入していただいたと感謝に堪えない。

四谷の千枚田だより

毎月一回、千枚田の活動、地域の出来事などの情報提供を行っている。（連谷、海老地区全戸配布）

<http://www.city.shinshiro.lg.jp/sight/hourai/senmaida.html>

さしず

七百年前、すでに稲作が行われていた歴史ある先祖の遺産「四谷の千枚田」を次世代に安心して継承してもらうべく、我々の世代に揺るぎない基盤をつくる義務と責任がある。それには、四谷の千枚田を文化財として「重要文化的景観」の指定を受ける。指定されれば景観の保護や管理、復旧などに国の補助が受けられるほか、観光地としての付加価値も期待でき、この地に活きる望みが湧いてくる。

後ろ向きは簡単、前向きに進みたいものだ。（舜）

高齢化する村を 支援するプロジェクト



アストラゼネカ（株）は医療用医薬品の開発、製造販売を行う製薬会社。十月十日（水）、社を休業日にし、社員三千人が北海道から沖縄までの全国五十ヶ所の農村でボランティア活動が行われた。

四谷の千枚田では百人の社員受け入れに戸惑いながらも綿密な作戦を練り待ち望んだが、当日は東名高速道路の集中工事というハプニングで到着が大幅に遅れ、午前中の作業は中止。

正午、バス二台でやっと到着し、「ふれあい広場」に於いて小山（泰）保存会長の歓迎挨拶、県新城設楽農水事務所鈴木建設課長さんのふるさと水と土ふれあい事業の主旨、事業内容の説明を兼ねた歓迎挨拶、小山（舜）総括による四谷の千枚田の概要説明などで幕を開けるその矢先、企業が地域に貢献する姿勢に高い評価を示す穂積市長さんも駆けつけ、この支援活動を契機に高齢、過疎化する中山間地の活性化にご助力願いたいと挨拶がなされた。



棚田のおっ母さんや先発隊の女子社員で作った棚田米のおにぎりやしし汁を囲んだ交流会では昨年

に続き二回目であり顔なじみも多く打ち解けた雰囲気がかかしこでみられた。



オリジナルの腰痛緩和体操の後、作業開始「県ふるさと指導員活動支援物資」として供給されたアジサイやツツジなどを同支援物資の唐鍬、鎌などを使用し、一班は村雲伸一を班長に千枚田入口付近の植樹、草刈り。二班は今泉良治班長に中間地点の石垣の草取り、稲刈り。三班は高橋庄一を班長にふれあい広場の植樹、環境整備をそれぞれに割り振られた保存会員、田吾作、棚田っ娘など四十人と一緒に心地よい汗を流した。ハプニングで開始は遅れたものさ

すが若い力(本当は、しし汁や棚田米のおにぎりが美味しかったから・・・)の結集、計画された作業は予想外に進み、お互いに達成感を得た。

お別れ交換会は全員が千枚田入り口まで徒歩で下がり、各班長のお礼の言葉に続き、AZ社の班員から男性一名、女子一名を無作為に指名挨拶をいただいた。お互いの謝辞を要約すると受け入れ側については「ご苦勞様、生気(気力)をいただいた。あんたんとうが植えたアジサイやサツキの花がきれいに咲くだけにまた見に来ておくれん。」等々。二班の班長は「来年は俺の班は全員女性を望む」など誰でも思っていると言えないことをツケツケ言っていた。

AZ社からは「お手伝いできるか心配していたが、棚田の皆さんの親切なアドバイスで思ったよりできたことに満足感を得た。また、リフレッシュができたことに感謝する」等々言葉が交わされた。

閉会は、お助け隊の林リーダーがキチツとしめ、童謡「ふるさと」をテープで流し、お別れを惜しんだ。

学校田の稲刈り

二十六日(水)、連谷小学校の全校児童十名は新城ライオンズクラブから贈られた稲刈り鎌で二十人のメンバーと稲刈りを行いました。

昼食はL.Cと保存会の協力で、用意された糯米でもちつき。きな粉やあんこもち、大根おろしなどをつけ、みんなでおいしく食べ、秋の収穫を体感しました。



金一封

二十六日、新城ライオンズクラブから鞍掛山麓千枚田保存会に四谷の千枚田の保全活動に活用してい

ただきたいと金一封が贈呈されました。ここに報告します。

みんなの農二河

シリーズ
九月二十九日に行われた稲刈りの状況は2ページに掲載。



こども農学校

J.A愛知東農協では今年も「こども農学校」を開き、田植えから収穫までの稲作体験を高橋庄一(顧問)から学びました。

十月六日、参加したこどもや父兄約百名が稲刈り作業を行い、自らが育てた稲の収穫を喜びあいました。

地産力ミニリ火事オヤジ

鞍掛山麓千枚田保存会後援の「ふるさときやらばん」新城公演(十四日)のチケット購入有り難うございました。おかげで、顔が立ちました。

汗なげな嘶

向山のやあく、チョット上んところにやあく、馬捨場があるのを知ってるかん。

ふん、あるつちゅうこたあ聞いたのだがやあく、雨の夜中なんかやアリンが燃えとるつちゅうし、恐そがいもんで行ったこたあないだぞん。

ありやあんのん、仏坂やなんかで荷付馬がやあくひつ転んで足を折っちゃったりして使い物にならん馬や谷底なんかへ落ちて死んだ馬をやあくあそこまで運んで埋けたぞうだだぞん。それでやあく、聞いた嘶だで、嘘だかふんと(本当)だからんがやあく、なるたけ浅く埋けといてのん、夜中にやあく、巡查に見つらんようにやあくソット掘つてのん、食つちやっただげなぞん。いくらなんだって、そんな馬鹿なこたあせんだつたらに・・・

行 平成十九年十月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
発 文 責 小山舜二